渋沢栄一が見た パリ万国博覧会と西洋近代経済社会

渋沢史料館　**関根　仁**

はじめに

近代日本で活躍した実業家・渋沢栄一が青年時代に、渡欧したことはよく知られている。渋沢は当時幕臣であり、フランスのパリで万国博覧会が開催されるにあたり、慶応３年（1867）に将軍名代として派遣された徳川昭武の随員として欧州に向かった。渋沢にとってはこれが初の海外体験であり、約１年半もの間にフランスをはじめ欧州各国を訪れるなかで、多くの先進的な技術、社会・経済に関する組織や制度を目の当たりにし、それらのいくつかを実際に体験することができた。

〈目　次〉

はじめに
１．渋沢栄一が見たフランス・パリ
２．渋沢栄一が見たパリ万国博覧会
３．渋沢栄一が見た西洋近代経済社会
むすびにかえて

渋沢がこの体験を、後に実業界での活動や社会公共事業に活かしたとする点は、これまでも多くの諸研究で繰り返し言及されてきた。筆者は渋沢史料館の学芸員として、渋沢の渡欧に関する調査研究に従事している。平成29年（2017）には企画展「渋沢栄一渡仏150年　渋沢栄一、パリ万国博覧会へ行く」を担当し、滞欧期における渋沢の活動や見聞事項を詳細に調査する機会を得た（注１）。

こうした調査研究から新たに明らかになった事項は多く、新資料、諸情報を今後活用していくことが望まれるが、滞欧中における渋沢の関係史料は、決して多くが伝来しているわけではない。渋沢が持ち帰った自筆日記、御用留、その他の書類の多くが関東大震災で焼失しているからである。渋沢にとって、青年期の渡欧がどのような意味を持ったのか。それを理解するためには、史料的な限界はあるが、滞欧中における渋沢の実務や行動を丹

念に検討していくことが必要であろう。

本稿はそのための基礎作業として、渋沢が初めての渡欧で、具体的にどのような「西洋近代社会」に触れたのかを、渋沢の「肉声」にこだわりながら概観することとしたい。

1．渋沢栄一が見たフランス・パリ

(1) 徳川昭武一行の渡仏

フランスのパリで万国博覧会が開催されることとなり、徳川幕府に参加を勧誘してきた駐日公使レオン・ロッシュの要請で、十五代将軍の徳川慶喜は実弟・昭武を名代としてパリへ派遣することを決定した。さらに昭武の渡仏には、幕府の外交と国際アピール、昭武の仏国留学という目的も含まれていた(注2)。

徳川昭武に随行するのは、外国奉行の向山一履、昭武の傅役である山高信離、また昭武の警護役の水戸藩士７名や伝習生、さらに商人として万博に出品した清水卯三郎なども含めて総勢33名となった。そのなかで渋沢は「御勘定格陸軍附調役」という役目であり、主に会計と庶務という「俗事役」を担当した。

慶応３年１月11日、徳川昭武一行は仏国船のアルフェー号で横浜を出港する。香港で仏国船アンペラトリス号に乗り換え、サイゴン、シンガポール、セイロン、アデンを通り、そして途中のスエズからは汽車に乗り、アレキサンドリアにて再び仏国船サイド号に乗船し、シチリア島、そして２月29日にマルセイユ、３月７日にようやくパリへ到着。船と鉄道を乗り継ぎながら、約２か月の旅であった。

▲渋沢栄一（「慶応三年民部公子渡仏一行写真」より）。渋沢史料館所蔵。

パリに到着すると徳川昭武は、幕府を代表して様々な公式行事に臨む。ナポレオン三世謁見式、ナポレオン三世招待観劇会や舞踏会、万博会場見学、万博褒賞授与式、フランス帝・ロシア帝閲兵の大調練視察のほか、各国皇族、代表者、その他の有力者が主催する晩餐会、舞踏会などに出席した。ヨーロッパの宮廷外交という舞台において、昭武は徳川幕府の存在をアピールした。また昭武一行はパリ市内を中心に、ブローニュの森、競馬場、ナポレオン一世の墓、軽気球、凱旋門、戦争図のパノラマ、植物園、動物園、大砲器械の貯蔵所、ノートルダム寺院、裁判所、パリ市内

▲徳川昭武一行の集合写真　マルセイユにて。慶応３年２月29日に徳川昭武一行はマルセイユに到着。この写真は一行がマルセイユ滞在中に宿泊した「ヲテル・デ・マルセイユ」で撮影されたもの。渋沢史料館所蔵。

の上下水道、病院など、様々な施設や名所等を視察している。

⑵　渋沢が見たパリ

渋沢はパリ到着の約２か月後に、郷里にいる妻・千代に宛てて「こなた事誠ニ大丈夫ニ而、ふらんすのはりすと申都ニ罷在候、御あんし被下間敷候」と、無事の知らせを送っている（注３）。

渋沢はパリ到着後も会計と庶務の仕事で忙しい毎日を過ごしたが、昭武に随行しながらパリ市内の諸施設やパリ万国博覧会を視察することができた。渋沢は初めて見るパリの街の様子に驚き、日本にいる家族や知人に宛てた手紙にそれらの感想を書いて送った。例えば従兄で学問の師匠でもある尾高惇忠に宛てた書簡には次のように記している。

当地物価の高き事、御国五六倍ニ御座候、然処金銀融通は誠自在を得、尤紙幣流通いたし、正金より貴く通用いたし候（中略）文物の富、器械之精ハ兼而承及処其実を見候而ハ一段驚歎途不拾遺行者譲路

抔其実際ニ御座候。将水火の運用便利なるハ如何にも驚愕全都地中総而水火道ニ而火ハガスと申形なくして燃へ、光焔尤も清明、夜ハ満面ニ照映して市街道途とも昼にことならす、水ハ総而噴水ニ而処々少さき吐水有之、其口より水を灑て塵を鎮し、人家ハ七八階、大概石ニ而築立（注４）

渋沢は、パリの物価が日本の５～６倍高いこと、金銀の売買が自由であること、紙幣が流通していて金よりも価値が高く通用しているといった経済状況のほか、水道管、ガス管が地下に埋めてあり、水道、ガス灯として便利に運用されていることや７～８階の高層建築など､モノや情報が豊かな街の様子に驚き、見聞した事などを書き送った。日本とは異なる、近代的なパリの街の様子に渋沢は感心したようだ。

２．渋沢栄一が見たパリ万国博覧会

パリ万博は1867年４月１日から同年11月３日まで、セーヌ川沿いのシャン・ド・マルス（練兵場）を会場として開催された。ここにタテ約490メートル、ヨコ約386メートルの巨大な楕円形のパビリオンが建設された。パビリオン内は同心円状に仕切られ、最も外側に最新の機械工業､内側に進むにつれて手工業、工芸、美術品が展示され、最も内側には中庭が設置された。会場の動力は蒸気の力でまかなわれ、欧米諸国が出品した最新の機械製品などが会場で注目を浴びた。会期中は約1,500万人の入場者があり、このパリ万博はその後の万博のモデルとなった。

日本が初参加した万国博覧会として知られ、幕府のほか薩摩藩、佐賀藩が独自に出品し、特に現地で幕府と薩摩藩がトラブルを起こし、幕府が権威を失墜したことでも知られている。

徳川昭武が渡仏した第一の目的は、パリ万国博覧会が開催されるにあたって、将軍・徳川慶喜の名代として種々の公式行事に出席し、幕府の存在を国際的にアピールすることであった。そして徳川昭武一行は万博会場を何度か視察しており、これに随行した渋沢は実際に見た万博会場の様子を、日本にいる一橋家家臣・川村恵十郎（えじゅうろう）に宛てた書簡のなかで次のように報告した。

博覧会展観も誠ニ盛大壮栄之段、凡宇内万国之物品実用虚美之器械等星並羅列毎事目を驚し候、御国の物品評判も至極よろしく已ニ鑑定家の品評ニ而英米利堅孛漏生其他両三国同様最上の功牌を請候儀一段之御国光御同慶之至ニ候（注５）

渋沢は博覧会の盛大さと各国の出品物に驚き、さらに日本の出品物の評判が大変良いことを伝えた。また日本の出品物がイギリス、アメリカ、プロイセンなどの欧米諸国と同様に「最上の功牌」を授与されたことで、それが「御国」の名誉であり、喜びの至りであるとの感想を述べた。

視察をするなかで渋沢は、万国博覧会が単なる出品物の陳列場ではなく、国家間の競争の場であることを実感しており、「最上の功牌」、つまりグランプリのメダルを受賞したことが、商品価値を高めることになり、後の国益につながることも見抜いたと言える。渋沢の目には、博覧会が国家、社会を発展させる産業奨励のためのイベントとして強烈に映ったのであろう。

3．渋沢栄一が見た西洋近代経済社会

(1) 渋沢の印象に残った3つのこと

パリ万博にまつわる公式行事が済んだ後、徳川昭武は随員たちを従えて、各国元首との謁見を主目的とした欧州巡歴に出かける。スイス、オランダ、ベルギー、イタリア、マルタ島(当時イギリス領)、イギリス訪問である。しかし、その出発直前に杉浦愛蔵、生嶋孫太郎、山内六三郎の帰国が急遽決定した。特に杉浦は外国奉行支配調役（二等書記官）として、昭武一行に関わる日々の公務日記、書類作成、筆写などの「書記役」を担当していた。杉浦の帰国に際し、渋沢は「書記役」の一部を引き継ぎ、会計・庶務に加えて公務日記や部分的な書類作成なども担当することになった。

渋沢は欧州巡歴の日々のなかで、各国元首謁見の様子や社会、軍事、産業・経済の状況、各所の視察、名産名品などを懸命に記録しており、好奇心旺盛に西洋の文物を見聞したことが分かる（注6）。

渋沢が後年に滞欧時の話をする際に、当時印象に残ったものとしてよく3つの事項を挙げる。1点目は、徳川昭武がベルギー国王レオポルド二世に謁見した際のことである。この時、昭武がベルギーで製鉄所を見学したことを話すと、国王は「ベルギーでは鉄を多く生産している。国が盛んになるためには鉄を沢山使うようになり、日本も鉄を買うようにしなければならない」と昭武に語ったという。渋沢はこの様子を見て、「西洋の君主は妙なことを言はれる、直様御商売に関係する」ことに「奇異」の思いを抱いた（注7）。

また渋沢はこの一件の後、他国の視察で「仏蘭西に、英吉利に、伊太利に各国の鉄事業、殊に英吉利の旅行にてはマルタ島の砲台の模様、ボルツムース（英国の軍港の名）の軍艦の設備などに付いて、此鉄の如何にも盛大なる有様を見て、成程白耳義王の言はれたことが事実に於て見えるのだと感奮」した（注8）。

2点目は、「官」と「民」との関係である。それは、幕府から嘱託されて名誉総領事を務め、徳川昭武の世話役であった銀行家のフリューリ・エラールと、フランス到着後にナポレオン三世が昭武の世話役として付けた陸軍大佐ヴィレットとのやり取りを見たことであった。渋沢は、日本で言えば「武士」階級の軍人であるヴィレットと、同じく「商人」の銀行家エラールが対等の立場であることに、「官尊民卑」の風潮が強い日本との大きな違

いを感じたのであった。

3点目は、フランスで株式を実際に体験したことである。欧州巡歴を終えた後、徳川昭武の留学費用を捻出するため、渋沢はヴィレット大佐に薦められ、政府公債と鉄道社債を購入した。後に渋沢は、「此時に成る程公債と云ふものは経済上便利なものであるとの感想を強くしました」と語っている(注9)。こうした機会から「合本主義」、つまり西洋の株式会社制度を学んだという。

(2) 渋沢が見た西洋近代社会の諸相

次に渋沢が後年に行なった講演や談話などから、欧州体験についての発言を見ていこう(注10)。

①「合本組織」(株式会社)

先述のように、渋沢が滞欧中に学んだものとして「合本組織」、つまり株式会社の制度がある。晩年に渋沢は次のように語っている。

> **私が合本組織を主張したと云ふのは、敢て仏蘭西の民主的な空気に刺激された事のみが動機となったのではないけれども、彼の地に於て感じた此の空気に少からず動かされた事は事実である。(中略)唯一つ仏蘭西滞在中に感じた事、我国は官尊民卑の弊害が甚だしい、これを微力乍ら改めて見たい、それには合本組織が一番いい**(注11)。

滞欧中に渋沢は、日本において「官尊民卑」の弊害が甚だしいことを改めて認識した。そしてそれを打破するためには、民業の発達が必要であり、それには「合本組織」が最も良い方法であると考えたのであった。その後、渋沢は明治5年に近代的な製紙会社である抄紙会社、翌6年には日本で最初の近代的な銀行である第一国立銀行の創立に携わり、以降も株式会社の設立と育成に尽力する。

②　出版および製紙業

渋沢が「新聞」を初めて見たのは滞仏中のことであり、実際に新聞の有用性を実感したほか、当時の体験を重ねて次のように語っている。

> **私が初めて新聞と云ふものを知ったのは慶応三年欧州視察に行った時のことで(中略)又其時に巴里で開かれた世界大博覧会の開会式に於て三世ナポレオンが試みた演説の如きも翌朝の新聞に報道されて、私共仏語の読めないものでも之れを翻訳さへすれば直に内容を知ることができました**(注12)。

また出版業、製紙業の重要性についても語っている。

> **私は思ふに文明とか人文の発達とか云ふ此の文の字は、どうしても矢張書籍に因るものなんだ。少くとも印刷物に因るものなんだ。(中略)印刷を西洋式活版に変へなければいけない。西洋式活版に何が必要かと云ふと紙を変へなければならない**(注13)。

渋沢は西洋の印刷・活字文化に触れながら、新聞の有用性、そして西洋式活版の必要、さらにはそれを刷るために必要な西洋紙の製造

についても力説している。

③交通、鉄道

渋沢は渡仏の途中、スエズからアレキサンドリアへ行く際に生まれて初めて蒸気車に乗った。この時に「つくづく其の便利なのに感心」して「欧州のかかる物質文明の発達を羨んだ」という(注14)。また渋沢は欧州とりわけロンドンの交通の様子に感心し、交通の発達こそが経済・社会上の利益につながると認識したことを回想している。

> **今より五十六年前私は海外に旅行を致した。(中略)当時倫敦に於て見たる交通の有様は今尚私の記憶に明らかに残って居る。(中略)当時私も偶然渡欧して仏、英、伊其他の交通状態を見て大いに感じ、我日本も斯くありたいと願ったのである。実はその頃私共は西洋人を野蛮視し夷狄視したものである。私は欧州各都市の交通状態を見て成るほど斯くありたい、これは経済上の利益である、また社会上の利益であることを感じた**(注15)。

渋沢は西洋における交通機関の発展を自ら体験し、人や物を運ぶというインフラの整備が物質文明の発達を促していることを強く感じたのであった。

④　女子教育

渋沢は明治期以降に女子教育奨励会、東京女学館、日本女子大学校などの女子教育に関与するが、滞欧時の見聞により「婦人に対する観念」が変わったと語っている。

> **婦人に対する観念は慶応三年民部公子にお伴して欧羅巴へ行つてから多少違つて来た。それ迄は東洋式の考で(中略)ところが欧羅巴へ行つて男女の交際を目撃して、「これではいかぬ。日本人の婦人に対する考は間違つてゐる」と云ふ事を痛切に感じたのである**(注16)。

渡仏以前の渋沢は、婦人についての考え方が「東洋的」なものであった。しかし西洋の「男女の交際」を見て、「これではいかぬ。日本人の婦人に対する考は間違つてゐる」ということを痛切に感じ、「女子を斯様に引立てねばならぬ。教育もせねばならぬ」というように考えが変化したという。ただし、それは「全然男女同権を認めるなどと云ふ説には同意し兼ねる」という限定的なものである。

⑤　地方公共物への意識

渋沢は滞欧時に、地方の公共物と住民との関係について学んだという。

> **私は若い時分に欧羅巴へ旅行をしまして、仏蘭西に居つて、巴里及其他の都市を彼の国の人に案内されて見物したことがございます(中略)それは同行した仏蘭西人が、別段名高い学者とか政治家とか云ふ人ではないやうでございましたが、何れの都市へ参つても、先づ其地方の公共物を能く注目しろ、日本で申さばお寺とか神社とか、其地方公共の力に依つて存立されて居る、今日で申せば公会堂とか美術館とか、兎に角多数の人の力に依つて造設されて居るものを先づ以て注目すると、其地方の人情風習、更に進**

んでは其住民の人格までが大抵解るものであると教へられました（注17）。

渋沢は徳川昭武に随行して、パリやその他の都市を案内された際に、どの地域においても日本で言えば神社仏閣にあたる公共施設に注目するように教えられた。そして公共的な物が、その土地の人々や歴史と密接につながっていることを認識したという。

渋沢は後に、西ヶ原一里塚旧蹟二本榎、玉川史蹟猶興会、史蹟名勝天然記念物保存協会東京支部など、多数の史跡や名勝の保存に関与している。こうした渋沢の活動の根底に、滞欧時の体験があることが窺えよう。

⑥　賓客を歓迎する市民

徳川昭武一行がイギリスのドーヴァーに到着した時のことを、渋沢は次のように回想している。

特に記憶に残つて居るのは、ドヴア海峡を渡つたとき、ドヴアの市民の総代が、日本の貴人を迎へると云ふので逸早く町の入口で歓迎文を読んだことであります。何んでも西洋の此の風習は、町の入口で、その入つて来る人に敬意を表し、町を自由に視察するための鍵を与へると云ふやうな意味で、尊い人に礼儀を尽すものださうでありますが、地方団体として有名な人を接待するのによい仕方である、結構な風習であると感じて居ましたから、当時グラント将軍を歓迎するに就て之を行ひたいと云ふので、益田、福地等の人々に諮つたところ同意を得ましたので、先づ新橋駅へ着いた時、此の方法を採つて歓迎文を読んだのであります（注18）。

ドーヴァー市民の代表が歓迎の文を読み上げ、市民が昭武一行を歓迎する様子に、渋沢は大きな感銘を受けたという。この時の体験は、明治12年（1879）にアメリカ前大統領グラント将軍夫妻が来日した際に活かされる。グラント夫妻が東京を訪問するにあたって、東京商法会議所と東京府議会は「東京接待委員」を組織し、渋沢と福地源一郎が代表となり、東京市民全体で歓迎したのである。

むすびにかえて

欧州巡歴を無事に終えた徳川昭武は、将来の日本における指導者となるべく学業に専念する。渋沢は引き続き、会計・庶務として昭武のお側に仕える。しかし、それも束の間、慶応４年１月２日、昭武たちが新春の祝辞を述べ合っている最中に日本から知らせが届き、一同は驚愕する。去る慶応３年10月に将軍・徳川慶喜が政権を朝廷に返上したという。その後、慶応４年５月には新政府から昭武に帰国命令書が届き、そのため長期留学は困難な状況となり、ついには帰国を決断することになった。

渋沢は何か特定の技術や知識を習得することを第一の目的として渡仏したわけではない。しかしながら、欧州で見聞した種々の事象は、後の渋沢の活動に直接的あるいは間接

的に、様々なかたちで影響したことは間違いない。

渋沢は自身の欧州体験について「勿論私の旅行は其初は唯仏国の博覧会に参列の御供、或は各国を巡回随行するに過ぎないから何等学び得ることが出来なかった」(注19)と消極的に評価することが多い。その一方で渋沢は次のようにも発言している。

> **欧羅巴に於ける風習の二三が、日本と全然相違すると看做して是は大に学ばなければならぬと決心したのが他日私の身を立てる端緒になったといふことは、自ら心遣りとする所であります**(注20)。

このように西洋社会の状況を目にしたことが、実際に後の活動に影響を与えたことを渋沢は認識しているのである。そして渋沢は次のようにも語っている。

> **其処で富と云ふものが国に取って甚だ必要だ、日本の国は今のやうな有様で迚も英吉利や仏蘭西と太刀打が出来ぬどころでは無い（中略）他の方面では今の実業界に力を尽し日本の国も富ますやうにすると云ふ事を覚悟しなければならぬ（中略）是が私の欧羅巴から帰りました時の自問自答種々に考えて（中略）今申上げる実業家となって社会の富を進めると云ふ事に努力して見ようと覚悟した始めでございます**(注21)。

欧州から帰国した渋沢は自問自答し、日本がイギリスやフランスに追いつくためには「富」が必要であると考え、実業界で尽力することを決意したという。

渋沢にとって幕末の渡欧は、日本の「官尊民卑」の風潮をあらためて認識し、「合本組織」を知ったきっかけであり、そして何よりも実業界で日本の近代化に貢献しようと「覚悟」する機会を渋沢に与えたのである。

(注1) 同企画展における成果として、渋沢史料館編『渋沢栄一渡仏150年　渋沢栄一、パリ万国博覧会へ行く』(2017年)、松戸市戸定歴史館・渋沢史料館編『忘れられた幕末維新　1867年パリ万国博覧会と徳川昭武、渋沢栄一』(2019年)がある。渋沢の渡仏に関する先行研究および参考文献については、これらに挙げてある諸資料を参照されたい。なお本稿は、拙稿「渋沢栄一が見た1867年パリ万国博覧会とヨーロッパ近代経済社会（中文)」(陶徳民・木村昌人他編『世博会与東洋的参与』上海人民出版社、2012年)および公益財団法人渋沢栄一記念財団編『渋沢栄一を知る事典』(東京堂出版、2012年)のうち拙稿「渋沢栄一とパリ万国博覧会」の項目をもとに、上記企画展の成果等を反映して執筆したものである。

(注2) 1867年パリ万博についての詳細、参考文献等については、寺本敬子『パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生』(思文閣出版、2017年)などを参照。また渋沢と万国博覧会との関わりについては、拙稿「渋沢栄一と万国博覧会―パリ万博（1867年）からパナマ太平洋万博（1915年）まで」(佐野真由子編『万博学―万国博覧会という、世界を把握する方法』思文閣出版、2020年)で検討した。

(注3) 「渋沢栄一書簡　渋沢千代宛」慶応3年5月15日付（渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第1巻、渋沢栄一伝記資料刊行会、1955年)。以下『伝記資料』と表記する。

(注4) 「渋沢栄一書簡　尾高惇忠宛」慶応3年8月2日付（『伝記資料』第1巻)。

(注5) 「渋沢栄一書簡　川村恵十郎宛」慶応3年8

月３日付（『伝記資料』第１巻）。

(注６) 欧州巡歴期間における渋沢の記録が「御巡国日録」である。渋沢はこの日記を筆写して幕府外国方や徳川昭武へ献上したほか、明治４年から５年に杉浦譲との共著として出版した『航西日記』全６巻の編纂にも活用している。なお『航西日記』については、拙稿「青淵漁夫・靄山樵者著『航西日記』の基礎的研究」（日本仏学史学会編『仏蘭西学研究』第45号、2019年）を参照。

(注７)「本社第二十八回春季総集会に於ける青淵先生の演説」（『竜門雑誌』第168号、1902年５月）。なお渋沢が語る３つの事項については、坂本慎一『渋沢栄一の経世済民思想』（日本経済評論社、2002年）などですでに言及されている。

(注８) 渋沢栄一「東洋製鉄会社計画の次第」（『竜門雑誌』第346号、1917年３月）。

(注９) 渋沢栄一「本邦公債制度の起源」（『竜門雑誌』第265号、1910年６月）。

(注10) 渋沢が講演等において、滞欧中の具体的な個別事例を網羅して語ることがないことや、欧州での体験や視察内容を詳細に語ることが非常に少ない点については前掲注７坂本『渋沢栄一の経世済民思想』で言及されているほか、拙稿「渋沢栄一の講演にみる幕末の欧州体験」（前掲注１『忘れられた幕末維新』）でも指摘した。

(注11)「株式会社―合本組織を主張せられし理由に就て」、「雨夜譚会談話筆記」雨夜譚会第30回、1930年６月24日（『伝記資料』別巻第５、1968年）。

(注12) 渋沢栄一「新聞の思ひ出」（『竜門雑誌』第390号、1920年11月）。

(注13) 渋沢栄一「出版業者に望む」、同文館主催全国書肆招待会、1912年10月15日（『伝記資料』別巻第５）。

(注14)「鉄道会議と鉄道国有に就て」「雨夜譚会談話筆記」雨夜譚会第６回、1927年４月26日（『伝記資料』別巻第５）。また渋沢栄一「本邦鉄道の回顧」（『竜門雑誌』第262号、1910年３月）においても、渡仏時に鉄道の重要性を認識した旨の回顧をしている。

(注15) 渋沢栄一「半世紀前の倫敦市街」、交通道徳会創立１周年記念講演会、1923年２月11日（『竜門雑誌』第420号、1923年５月）。

(注16)「今後の女子教育に就ての御感想」「雨夜譚会談話筆記」雨夜譚会第26回、1929年10月29日（『伝記資料』別巻第５）。

(注17) 渋沢栄一「大偉人の功徳」、埼玉県川越町・星岳保勝会総会での講演（『竜門雑誌』第331号、1915年12月）。

(注18) 渋沢栄一「グラント将軍歓迎の追憶」（『竜門雑誌』第509号、昭和６年２月）。

(注19) 渋沢栄一「穂積工学士の帰朝祝宴に於て」（『竜門雑誌』第320号、1915年１月）。

(注20) 同上。

(注21) 渋沢栄一「論語と算盤」、千葉県旭町弘楽館、1918年９月22日（『伝記資料』別巻第５）。